

# 医院だより

秋 山 医 院

藤岡市小林748-8

☎0274-22-8315

**九月** 別名 長月(ながつき)・建戌月(けんじゅつげ)  
つ・季秋。晩秋、窮秋、高秋、暮秋、残秋、末秋  
秋が深くになると暮れるのが早くなり、長時間にわた  
つて月が見られるために長月と言われます。

## 『九月の花』

菊、彼岸花。ダリア、秋海棠(しゅうかいどう)、釣  
船草(つりふねそう)、芙蓉、松虫草、反魂草(はん  
ごんそう)、吾亦紅(われもこう)、宮城野萩、桔梗、  
女郎花、男郎花(おとこえし)、藤袴(ふじばかま)

紫御殿



山上憶良、秋の野の花を詠める歌

秋の野に 咲きたる花を 指折り(およびおり)

かき敷(かぞ)ふれば七種(くさ)の花

(万葉集・卷八 1537)

萩の花 尾花 葛花 瞿麦(なでしこ)の花

女郎花 また藤袴、朝貌(あさがお)の花

(万葉集・卷八 1538)

## 『九月の言葉』

神の教育事業、これを称して歴史という。そして歴  
史はエデンの園における人類始祖の試練をもって始  
まり、ひいては二十世紀の今日にいたる。歴史には戦  
争あり、国の興亡あり、悲劇は悲劇に次ぎ流血淋  
漓、これを読む者を酸鼻の念に堪えられなくさせる。  
しかしこれが救済(すくい)の時期である。多くの聖  
賢君子はこの時期においてこの世に顕れ、ついに神の  
子イエス・キリストがこの世に降られて、私たち人類  
に死んでも死ぬことのない道をお開きになった。人類  
の罪悪は神をその独子(ひとりご)をお降しになるほ  
どに彼の心を傷めさせたのである。けれども愛の無  
尽蔵にある神は悪に勝つに足る善を己に蔵しておら  
れるから、人類の救済は期して待つべきである。人が  
神の子となりつつあるときである。

(内村鑑三『一日一生』八月二十六日)

## 『九月の暦』

- 一日 二百十日、防災の日、関東大震災記念日、富山八尾風の盆
- 八日 白露 いよいよ秋も本格的となり、野草に白露が宿りはじめます。
- 九日 重陽 陽数九が重なる意から来ていて、古くから菊花を酒に浮かべて飲んだり、栗飯を食して不老長寿を祝う例がありました。
- 十一日 二百二十日
- 十三日 十五夜
- 十五日 老人の日
- 十六日 敬老の日
- 二十日 彼岸入り、空の日、動物愛護週間
- 二十三日 秋分の日
- 二十四日 結核予防週間
- 二十六日 彼岸明け

参考 鈴木充広著「暮らしに生かす旧暦ノート」河出書房

平成三十一年神宮館運勢暦(神宮館)

暮らしの歳時記365日『今日は何の日か?』(講談社)

## お知らせ

### 一、保険証の提示について

月の最初の受診時には、受付に保険証を提示ください。

### 二、診療案内

- 一般外来診療・往診・在宅医療
- 禁煙外来
- 骨粗鬆症の検査・治療
- ピロリ菌有無の検査と除菌
- CT、MRI、PETの予約
- 胃カメラ・大腸カメラ
- 肺炎球菌・带状疱疹ワクチン

### 三、外来の一部予約制の利用について

外来の混雑で迷惑をおかけしています。

待ち時間を減らす努力はいつも心がけておりますが、救急で重症な患者さんが多く、全員の予約制は取れない現状です。どうしても時間に制約がおありの方に

☆1時間**2名**ずつ、予約制で診療を行っています。前日まで受付けておりますので、電話で予約ください。ご利用ください。

## 四、群馬県保険医協会

### 二十四時間健康テレホン

電話〇二七―三三四―四九七〇

<http://www.raijin.com/kenko/>

月	狭心症
火	秋からのお肌対策
水	口内炎
木	リウマチと免疫
金	歯ぎしりについて
土	若年性更年期障害



マルバルコウ

庭の千草 作詞 里見 義

アイルランド民謡

一 庭の千草も 虫の音も

枯れてさびしく なりにけり

ああ 白菊

ああ 白菊

ひとり遅れて 咲きにけり

二 露にたわむや 菊の花

霜におごるや 菊の花

ああ あわれあわれ

ああ 白菊

人の操(みさお)も かくてこそ

原曲の「庭の千草」はアイルランド民謡の旋律に、十九世紀の国民的詩人とされたトマス・ムーアが詩をつけ、「夏の名残のバラ」として発表された。

「夏の名残のバラが、ひとりさびしく咲いている」というテーマであった。旋律はトラディショナルなもので、エドワード・バンディングがまとめた「古代アイルランドの音楽」にも収められ、ベトーヴェンはここからこの曲を引き、「20のアイルランドの民謡集」の第六曲にいれ、メンデルスゾーンも、この曲をもとにピアノ幻想曲(作品15)を書いている。

この曲を日本に持ち込んだのは、ボストンで日本人留学生に西洋音楽を教え、のちに音楽取調掛の要請で来日したルーサー・ホワイティング・メーソンでした。彼が日本人の子供たちに歌わせたいと数多くの西洋の音楽の曲を選び、音楽取調掛の伊澤修二らが国語学者を中心に作詞させました。「庭の千草」の作詞には、音楽取調御用掛の里見義(ただし)があたりました。当時の日本では西洋種のバラはなじみが薄く、伝統的な秋の花の菊が代わりに選ばれます。日本人の心の正しさを象徴する花でもあり、特に白菊は清楚さがきわだっていたのが理由でした。明治17年、「庭の千草」は「菊」という題名で、「小学唱歌集」に発表されました。

しかしこの曲自体は、メーソンが紹介する以前に、讚美歌として日本に入っていたことがわかりました。

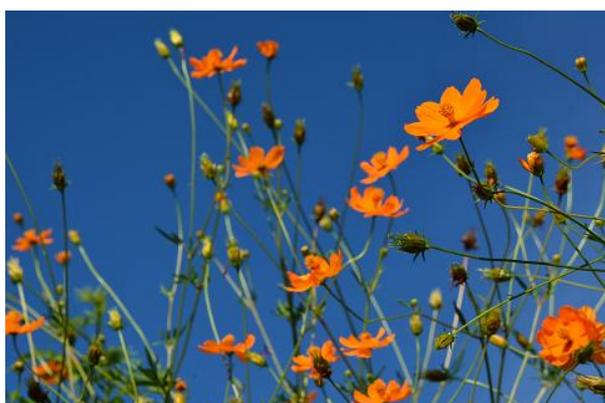
明治6年に来日して、横浜山の手教会を立って布教活動をはじめた宣教師ネーサン・ブラウンが明治9年に発刊した日本で最初の楽譜付き讚美歌集の中に「夏の名残のバラ」として入っていたのです。この讚美歌集は10年くらいしか使われていなかったため、ちょうどこれと交代するうちに「庭の千草」が登場したことになりました。歌詞の大意は、次のとおりです。

晩秋、すべての花々が枯れ、虫の声さえ聞こえてこない。夜露にも霜にも負けることなく、白菊だけが美しく咲き誇っている。人の生き方も、白菊のように孤高を守り、凜として清くありたい

作詞者、里見 義は下級武士として徳川幕府に仕え、五十歳をすぎてから上京したのち、音楽取調掛になった。多くの苦労や忍従を経験した里見にとつて、この歌のテーマは日本人の心の花、白菊でなければならなかったのでしょう。

(明治十七年)

学習研究社『私の心の歌夏』から引用改文



# けんこう (一一八)

## 血液検査でわかること

### はじめに

医療機関で採血して結果を聞いても口頭だけでどんな検査をして、どういう結果だったかわからない人がいます。私は、説明と検査会社からの報告用紙をお渡ししていますが、これは次の医療機関に行くときにも利用できます。電子カルテでは、用紙のほかに検査結果が全部カルテに残りますので、一時点での検査結果だけでなく、経時的な数値の検討もできます。どなたでも注射は嫌ですが、そこから大きな情報を得ることがあり、採血結果だけで自覚のまだない時期に重篤疾患が発見された場合が数例あります。通常行う血液検査からどんな情報を読みとることができるのか、『NHK』きょうの健康(9月号)で特集していたので、これを参考に考えてみましょう。

### 一、血液検査でわかること

血液の主な役目は、全身細胞に酸素を運び、二酸化炭素を受け取ることです。赤血球がその役目を担っています。白血球はウイルスや細菌から体を守る働きを持ち、血小板は血液を固めて出血を止める働き

があります。血液の中にはそのほかに体の栄養素やホルモンなど多くの成分が含まれています。

血液検査で見つけることができる病気や異常には次のようなものがあります。

貧血、・肝臓や腎臓の異常、脂質異常症、高尿酸血症、糖尿病、血液のがん(白血病など)、感染症、心不全など

### 二、見逃したくない血液検査の項目

血液検査の項目のなかには、自覚症状があまりなかったり、すぐに診断がつかないため、注目されにくいものがありますので注意が必要です。

#### ① 白血球増加

発熱などの自覚症状がなく慢性的に白血球増加があるときには、喫煙が原因になっていることがあります。禁煙で正常化します。喫煙習慣がなく慢性的に白血球増加がある場合には慢性骨髄性白血病があるかもしれないので注意してください。

#### ② 貧血

鉄欠乏性貧血があるときは、原因疾患をきちんと調べる必要があります。

(私の経験では経時的に見ていると、正常

範囲にありながら徐々に下降している人で、大腸がんや胃がんが見つかった例が数例ありました)

### 三、自己負担で受ける追加の検査

一般の健診や人間ドックでは見つかからない病気があるので、気になる場合には、費用は全額負担ですが、追加して受けたほうが良い検査があります。調べてみたら、病気が潜んでいることが多い検査として、甲状腺ホルモンとフェリチンがあります。中高年の女性で、食欲があるのに痩せて脈が速く、暑がりの人とか逆に食欲がないのに体重が増え、脈が遅く、寒がりの人は甲状腺の病気が疑われるので甲状腺ホルモンを調べるとよいでしょう。

血液検査では貧血はないが、貧血症状がある場合(潜在性鉄欠乏、隠れ貧血とも呼ばれます。日本女性の2割、月経のある女性の4割)、フェリチンという鉄貯蔵タンパクの測定をすると診断がつきます。

## 院長のひとりごと(百六十四)

### 母の遺言、父の遺言

◇母は言葉に力がある人であった。母の言葉はそれが話されたその場面と口調、抑揚と頭に想い浮かべることができると。時に記憶していた短歌でも空で詠んで見せると、子供たちは感心して、「国語の先生だ」「国語の博士だ」と持ち上げはやし立てた。

◆父は逆に言葉数の少ない人であった。話しかけても黙ってキセルをふかしていた。一吸いか二吸いで雁首に詰めた刻みタバコが燃えつきると煙草入れの蓋に火玉を叩いてとって置き、次に詰めた煙草を近づけて火をつける。仕草のひとつひとつが規則正しく進んでいくので、見ていて退屈がない。吸い込むときに頬がこみ、吐き出すまでの呼吸にいつしか自分も呼吸を合わせているのに気づく。

父は皆が言い尽くすと、「それはこういうことかい？」とまとめの質問をする。それがけっこう的を射ていた。

◇祖父は父の長兄が日露戦争に出征するとき、同じ村から同じように出兵する我が子を見送ろうと親たちが上京していったが、一人だけ行こうとしなかった。人前で涙を見せるのを良しとしなかったのかもしれないが、あの人はそういう人だったと祖父を知る人はい

っていた。間もなく戦死の報が入った。交流のあった曹洞宗の新井石禅師に碑文を書いてもらい、天満宮の路傍に石碑を立て、高野山に永代供養を頼んだ。

ツユクサ



◆父の次男(私の次兄)は比較的体が弱い時代があつて、高校を卒業して乳業関係の会社に勤めたが、貧血で倒れたと連絡があり、父と母が夜中に急いで出かけて行ったことがある。幾年かして、その次男が宮城に転勤、さらに北海道に転勤と決まった時、父も母もおろおろしていたが、父がおろおろしている姿を見た母は、「男ともあるうものが、自分の子供が戦争に行くわけ

でもないのに、おろおろするものじゃない」と一喝した。まさに武士の娘であった。確かに我が子を戦地に送って亡った祖父の思いに比べれば格段の心やすきではあったのだが、この時の母の剣幕は我が家では長く語り草になった。

◇父は、4人の男の子のうち二人に戦死した自分の長兄と、子供のいなかった次兄の名前の一字(邦、常)を使って名前を付けた。六人目の末っ子の私のころになると一字をもらつてくる人もおらず、役場に届けるギリギリの日の朝、高校に行こうと玄関で靴を履いている長姉に、「名前は何がよいか？」と付きまとつたそうである。急いでいた姉が辞典をカバンから取り出して、「辞典の典の字をもらつて『典夫』でよいだろう」と言つて決めたのだと、姉から何度も聞いた。お前の名前は、私がつけたんだぞ、と何度も威張られた。姉とは十六歳違い、もう一人の母親のような存在であった。姉も、父の一見優柔不断と、母の決断力を比較して想い出を話すことが多かつたが、父のことを一番好きだったし、父も姉のことを好きだった。嫁いだ後に、「お父ちゃんに優しい人だ、情が細かい人だ」としみじみ私に語ってくれたことがあつた。父が、戦後のことで自分が教師でありながら勉強が好きで娘に教科書を買つてやれない不甲斐なさを姉に伝え

た古い手紙を私は土蔵の中で見つけて読んだことがある。

◇母には二人の兄と二人の姉、一人の妹があつた。長兄は家業を継いで越後湯沢で医業を続けたが、次兄は地元の高校で事務をやっていたという。頭脳は弟のほうが明晰だったらしいが、気短で喧嘩しやすく中途でやめてしまい、兄の家の一隅に家族で住むことになつた。一つの家に二家族はうまくいかぬことが多く、母は私たちにはよく「兄弟は一緒に住むべきではない」と戒めたが、自らは、長女を、その夫の実姉と一緒に住んでいる家に嫁がせてしまい、また次女は嫁がせずにしまい、長兄夫婦と暮らさせるといふ失敗をやつてしまった。これで多くの不幸が起きることになつた。

どことなくひょうきんなザクロ



◆母は私が、短気な母の次兄によく似ているといつて心配し「決して短気を起こしてはいけない」と何度も諭され戒められた。今ではあまり耳にしないが、赤穂浪士の一人、神崎与五郎という武士が、討ち入りの大事を果たすために、馬子に絡まれ、公衆の面前で馬子の股の間をくぐらせられるという侮辱に受けたが耐えて、ついには討ち入りが成功した話や「ならぬ堪忍するが堪忍」という言葉をなんども話してくれた。

◇私の短気は仲間のうちでは有名だったので自分でも認識はしているが、確かに今でも爆発しそうになることが多く、そのつど母の言葉を思い出している。

母は言うことはいかにもきつぱりと言いつ切る人ではあつたが、自分のこととなると身内の情に信頼を置きすぎて、おぼれてしまうことがあり意外に失策が多かつたのかなと今では考えている。

◆最近思うことは、自分が老年期の父に似てきたな、ということである。歩き方、一見融通の利かなさ、決断力のなさ、などなどである。

でも、しかしである……たしかに、友人や家族で食堂に入ったとき私は、何を食べたらいいか、ほとんど決められない、シャツでも、靴下でも、靴でも大体は家内任せである。ある意味ではそんなのどつちでもいいんだという不逞な気持ちらが腹の底にはある。そして、大きな決定の時、父が

煙管をいじっていたように、私は耳をつまんだり、目をこすったり、ひげを抜いたり、鼻毛を引っ張ったりしながら、気持ちを集中して、いつかは物事の判断を下せるようになったらいいなと祈っている。

ユウゲシヨウ



